

# 夜なき石と

## うなり石 (緒川)

入海神社の鳥居をくぐって石段を登って

くと、途中、右側の石垣に組み込まれたひととき  
わ大きな石の前に出ます。この石は、上部が掘  
りくぼめられて手洗いとなっており、正面に次  
のような文字が刻まれています。

銘 曰

此石在當里

數哦古城裏

怪異傳無取

奉神爲水器

寛延二己巳歳

仲秋 吉旦

「銘に曰く。此の石は、当里にあり。しばしば

古城の裏にうなる。怪異伝わり、取るもの無し。  
神に奉り、水器と為す。」

と読むことが出来ます。寛延二年は、西暦一

七四九年で、いまから二百年ほど前、ちよ

うど、江戸時代の中ごろにあたります。

この石は、もとのこの村の古城、すなわち緒



▲ 夜なき石

川城の跡がわじょう あとにあり、そこから、しばしば犬の遠いぬ とおぼえのような悲かなしいなき声こゑをあげました。

「おい、ゆうべ、あの気味きみの悪いなき声こゑを聞きい

たかや。」

「聞きいたとも、どうやら、あのなき声こゑは、古城ふじろのほうから聞きこえてくるぞ。」

「なんでも、古城ふじろの草くさむらにとつともない大石おおいしが二つあつて、雨あめの降ふる暗くらくさみしい晩ばんになると、その石いしがなき声こゑを上げあげるのだそうだ。」

「そりや、お気きの毒どくな最期さいごを遂とげられた、緒川おがわ城主じょうしゅ、水野信元みずののぶもとさまのうらみの声こゑにちがいない。」

「くわばら、くわばら。」

村人むらびとたちは、たがいにうわさしあつては恐おそれ

るばかりで、だれも、その大石を引き取って供養しようとする者はいませんでした。

しかし、ついに、寛延二年という年に、村人が相談しあつて、古城にあつた大石の一つを

かきがら地蔵の境内へ運び、もう一つをここ

入海神社の手洗い石として境内に移し、みんな



でお参りするようになりまして、かきが



▲ うなり石

ら地蔵の方の石を「うなり石」と、入海神社の石を「夜なき石」と呼ぶようになりましたが、もう、あの気味の悪いなき声を聞くことはなくなつたということです。